

(松橋東支援) 学校 平成 29 年度学校評価表

1 学校教育目標

生命の尊重・深い愛情を基盤に、幼児児童生徒一人一人の個性や特性を大切に可能性を最大限に伸ばし、豊かな感性を育み、主体的・自立的に生きていこうとする幼児児童生徒を育成する。

2 本年度の重点目標

- (1) 安全で安心な教育環境の整備
 - (2) 子どもたちの夢の扉を開く教育活動の充実
 - (3) 地域から愛され、頼りにされる学校
- ※ 防災型CSの運営を通じた災害時の連携体制の構築と子どもたちの防災意識の高揚

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	経営方針等の具現化	本年度の重点目標や具体的な努力点等の確実な実践	・重点目標と具体的な努力点を明確に示して、職員一人一人の意識を高め日々の実践に浸透させる。	・具体的な努力点を各分掌部の取組内容と重ねて明確化することで、全職員が共通認識を持ち各自が学校経営上の役割を自覚して実践に当たれるようにする。	B	・職員一人一人の業績評価において、学校の重点目標を踏まえた目標設定を行うことができた。 ・特に研究面においては、自立活動の取組を重点課題として職員全員が授業実践の質的向上に力を注ぎ、学校全体の指導力向上を果たすことができた。
	地域への理解啓発	頼りにされる学校づくり	・学校公開週間や学校行事、ホームページ等を通して、本校の教育活動についての理解啓発を図る。	・学校公開週間を今年度は2回実施し、より多くの方々に本校を知っていただけるようにする。 ・療育センターと連携を図り、お互いの行事がより安全に実施でき、充実するよう、協力関係を深める。	B	・学校公開週間を今年度は2回実施し、6月に43人、11月に25人の参加があった。教育・福祉・地域と幅広い参加があるため、今後も丁寧に継続し、本校への理解を広めたい。 ・療育センターと合同で実施する行事は、協力体制に関する協議を行ったことで、毎回互いに協力して実施することができた。
		地域に愛される学校づくり	・地域ボランティアグループ等との連携を図る。 ・近隣幼稚園、学校、企業や児童生徒の居住地校との相互理解を図る。	・定期的に本の読み聞かせや演奏会を実施する。 ・行事等への参加や協力の呼びかけを行う。 ・事前打ち合わせを十分に行い、子どもたちが関わり合うことができる活動内容を設定する。	A	・月に1回の本の読み聞かせと学期に1回の演奏会を実施することができた。 ・幼稚部を中心に、地域の人材を活用した活動に取り組むことができた。 ・地域人材の更なる活用を図る。 ・事前打ち合わせを行い、子どもの実態に応じた活動内容を設定し実施することができた。また、ビデオレター等による間接交流も実施することができた。
授業の充実	教育課程	教育課程・教育内容の適正化	・子どもの実態を的確に把握し、それに基づいた教育課程の編成や教育内容の充実を図る。	・保護者との面談や療育センターとのケース会議訓練見学等を通して的確な実態把握を行う。 ・実態に応じた指導目標、年間指導計画を設定し、授業を実践する。 ・教育課程・教育内容の見	B	・保護者との面談を適宜実施できた。センターとのケース会議では、医師等も含めたケース会議も必要に応じて実施することができた。 ・子どもの実態把握に基づき個別の指導計画を作成し、授業実践に生かすことがで

				直しを各学部で定期的に行い、教育課程検討委員会で学校全体の動きや系統性について検討を行う。		きた。 ・教育課程検討委員会を開催し、系統性のとれた教育課程を考えることができた。 ・新学習指導要領実施に向けた課題等を整理し、学校全体で取り組んでいく。
	実践研究	実践研究の推進	・自立活動の指導における目標及び具体的な指導内容の設定のプロセスを学校全体で理解しそれをもとにした実践をまとめる。	・参加型研修を実施する。 ・各研修会でのアンケート結果をフィードバックし、その方法等を改善するようにする。 ・実践のまとめを作成する	A	・グループ研修や講師招聘研修、全職員1人1事例をまとめることを通して、自立活動の指導における目標設定等のプロセスについて理解が深まった。今後、次年度に向けて、目標等の見直しや再検討を行っていく。
キャリア教育 (進路指導)	将来を見据えた取組	キャリア教育の視点に立った授業の実践と改善	・「身につけたい力一覧表」の利用を促進し、進路に関する意識の向上を図る。	・年度当初に「身につけたい力一覧表」の使い方について共通理解を図るとともに、具体的な利用例のアンケートを実施し、利用実践集を作成する。	B	・1学期に「身につけたい力一覧表」の使い方と、昨年度分の利用実践集を配付し共通理解を図ることができた。今後は、本年度の利用アンケートを採り、昨年度と合わせた利用実践集を作成する予定である。
	進路情報・研修	進路情報の収集と発信の推進	・進路情報に関するニーズをもとに保護者等に発信し、進路に関する興味関心の向上を図る	・年間に1回「進路便り」を発行し、ホームページに掲載する。 ・保護者等のニーズをアンケートによって収集し、ニーズに即した保護者参加の研修を年間に1回実施する。	B	・「進路便り」は県内支援学校高等部進路状況についての情報を発信し、ホームページに掲載することができた。研修については、保護者アンケートを実施し、ニーズに即したPTA研修を、2月に実施する予定である。
生徒 (生活)指導	安全で安心な教育環境	危機管理対策の充実	・危機管理マニュアルを基本にしながら、その場の状況に応じて臨機応変に対応できるようにする。 ・学校の防災年間計画を作成する。	・緊急対応訓練や避難訓練を適宜設け、反省事項を検討し職員と共通理解を図って次回に活かす。 ・担任や教科担当と協力しながら年間計画を作成し幼児児童生徒の防災意識を喚起する。	B	・地震・火災の避難訓練や救急法の講習会、緊急搬送訓練を実施することができた。行方不明時の捜索訓練では改善点を出し合い、職員で共通理解を図って、マニュアルを見直すことができた。 ・防災年間計画を作成し、各教科で取り組んだ。来年度は、各教科のつながりや全体で取り組む活動などを検討していきたい。
	環境整備	校舎内外の安全管理及び環境整備	・衛生的で安全な学習環境や、四季の花々のある環境づくりに努める。	・定期的に特別教室の掃除と職員作業の時間を設ける。毎月1日に安全点検を実施すると共に、その月の重点事項を職員間で再確認する。また日頃から各クラスを中心に協力して環境美化に努めるようにする。	B	・事務部や全職員の協力で校舎内外の片付けや、美化に努めることができた。 ・安全点検後、危険・修繕箇所があった場合は、事務部に速やかに対応を行い、改善することができた。 ・花壇の整備も計画通りに実施することができた。
人権教育の推進	人権に関する実践と研修等	人権尊重の視点に立った授業実践力の向上	・人権尊重や命を大切にすることを育む教育の視点に立ち幼児児童生徒一人一人を大切にした授業実践力の向上を図る。	・学部、クラス、グループなどを単位として、人権学習に関する授業に全教員が取り組む期間を設定する。 ・「水俣病をめぐる人権」に関する授業や人権教室	B	・全ての幼児児童生徒を対象に人権学習に関する授業や松東人権フェスタ(人権教室)を実施することができた。特に一般学級では、クラス毎に「北朝鮮による拉致被害者の人権」等テーマを決めて

				などにより、幼児児童生徒が正しい知識と判断力を身に付ける機会を設ける。		学習し、その学習を通して人権尊重の精神を身に付けることができた。人権学習の授業づくりについては、職員が研修を深める機会を更に設けていきたい。
		職員研修の充実	・職員の人権意識の高揚を図る。	・人権教育に関する校外での研修会に非常勤職員を除く全ての職員が1回以上は参加する。 ・自身の人権教育の実践や日頃の幼児児童生徒との関わり方を振り返る人権レポートを全職員が作成し、グループ協議において意見交換を行う。 ・人権教育に関する校長講話や水俣現地学習などの研修会を実施する。	B	・人権教育に関する校長講話や人権レポートによるグループ協議、水俣現地研修等、職員研修を計画通りに実施することができた。特に人権レポートに関しては、幼児児童生徒への関わり方について、自己の振り返りの機会を持つことができた。更に職員の人権意識の高揚を図るために、職員の心に響く研修内容や方法を工夫していきたい。
	「命を大切に作る心」を育む教育	豊かな感性を育む教育活動の実践	・幼児児童生徒の豊かな感性の育成を図る。	・「こぼとの丘」の取組や挨拶運動などを通して、思いやりや感謝の気持ちの高揚を図る。 ・「心のきずなを深める月間」の取組として一般学級の児童生徒が標語・メッセージ作りや作文に取り組む機会を設定する。	A	・「こぼとの丘」の取組や「心のきずなを深める月間」の取組を通して、思いやりのある声掛けをし合うようになる等の幼児児童生徒の変容が見られた。特に「こぼとの丘」の取組では、執行委員会の児童生徒が全校集会で参加の声掛けを行うことで、幼児児童生徒が主体的に取り組む雰囲気づくりができた。
いじめの防止等	いじめの未然防止及び早期発見	執行委員会の活性化	・幼児児童生徒が自分のことや友達のことを知り、自分から言葉や行動、表情等で思いを伝え合う関係づくりを図る。	・執行委員会が中心となって、全校集会(月1回)、あいさつ運動(年2回)、牛乳パックの回収(年2回)、「こぼとの丘」の取組等を告知から準備そして実際の活動に、全校幼児児童生徒で取り組めるようにする。	B	・執行委員が係を分担し、自分たちで全校集会や「こぼとの丘」の取組の準備、発表、お知らせ等を行うことができた。あいさつ運動(2回)は全員で、牛乳パック回収(1回)は分担して取り組むことができた。今後は更に執行委員の教育的ニーズに応じた活動内容となるよう、検討を重ねたい。
		学校と家庭及び療育センターとの連携	・よりよい人間関係や心のケアにつながるよう、家庭や療育センターとの連携を図る。	・家庭とは連絡帳や学級懇談会、療育センターとはケース会議や回診等を通して情報交換を行い連携を図り、幼児児童生徒の実態把握に努める。 ・人権に関わる問題があった場合、療育センターや家庭と連絡を取り合い早急に情報を共有する。	B	・毎月の入退院連絡会や回診、学校・療育センター行事やケース会議を通して情報交換ができ、幼児児童生徒の実態把握と学校、家庭、療育センターとの連携を図ることができた。事後対応にならないよう、更に連携を密にしていき、早期対応が取れるよう努めたい。
		いじめの防止と子どもたちのよりよい関係づくり	・いじめ防止、早期発見を図る。	・学校いじめ防止対策委員会を年3回実施する。そのうち1回は、いじめ防止に関する職員研修を実施する。 ・幼児児童生徒の様子について、職員朝会や学部会、アンケート等で共	B	・学校いじめ防止対策委員会を中心に、幼児児童生徒の心のケアやいじめ防止に対する職員の意識を高めることができた。幼児児童生徒の心身の状態を確認し、共通理解する場や時間を確保することができた。校内だけで

				通理解し、いじめの芽を発見できるようにする。また、保健室等の相談窓口の充実を図る。		なく、療育センターでの様子も共通理解できるよう、連携を密にし、情報共有を深めていきたい。
地域支援	センター的役割の推進	教育相談等への対応及び高校における通級による指導の実施に向けた取組	・上益城地域の学校からの相談に対して、丁寧で適切な対応を行う。 ・高校における通級による指導の導入に向けて、当該高校や特別支援教育課と密に連携を図りながら推進する。	・相談に対して、実態や状況等を的確に把握し相談に応じる。 ・推進していく上での課題や方策等を関係者と共有し、連携した取組を行う。	A	・多人数の相談については、2人体制での巡回を行った。保護者からの相談についても、学校や福祉機関との連携を図りながら対応した。 ・先進校や他の2校の情報や特別支援教育課からの指導を受けながら取り組んだ。次年度実施に向けての準備が整いつつある。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	防災型コミュニティ・スクールの立ち上げ	三校連携による防災体制づくり	・松橋高等学校、松橋西支援学校とともに、三校連携による松橋地区の防災体制の基礎を築く。	・三校合同の学校運営協議会を年2回実施し、松橋地区の防災に関する現状や課題等を確認しながら三校が果たすべき役割を確認し整理する。	B	・予定通りに、三校合同の学校運営協議会を年2回実施することができた。 ・松橋高等学校、松橋西支援学校と協力して、発災時の連絡体制を確認したり、防災マニュアルの統合版を作成したりすることができた。 ・今後は細かい部分を宇城市や2校と連携しながら進めていきたい。
		「希望の里」における防災体制づくり	・近隣関係機関や地域住民と新たに防災を視点とした密接な関係を築き「希望の里」における防災体制を立ち上げる。	・「希望の里」における学校運営協議会を年2回実施し、防災マニュアルの作成や合同での防災訓練の実施等を通して、地域の期待に応える防災体制づくりを進めていく。	A	・予定通りに、「希望の里」学校運営協議会を年2回実施することができた。 ・防災マニュアルを作成し、希望の里3施設と災害時の協力・連絡体制や希望の里災害対策本部の設置等の共通理解を図ることができた。 ・今後は防災コミュニティ施設や防災広場の完成を視野に入れながら、希望の里他施設との連携を図り、防災マニュアルの充実を図っていきたい。

4 学校関係者評価

- ・職員は目標意識が高く、幼児児童生徒一人一人に対してきめ細かな配慮ができていると感じる。
- ・学校公開週間等の対外的な取組や地域との関わりについては、本校の保護者への周知を図り、学校全体の取組について理解を深めていただく必要がある。

5 総合評価

- ・今年度の研究テーマとして設定した「自立活動の指導における適切な目標及び具体的な指導内容の設定をめざして」は全職員の共通した課題となり、学校全体の授業力向上につながった。また、「教育くまもと」への掲載や県教育委員会による学校訪問等を通して、本校の強みとしてアピールすることができたと考える。
- ・その他の校内での実践についても、これまでの取組に工夫改善を加えながら充実を図ってきたところだが、今年度は対外的な取組として新たに、防災型C Sの立ち上げと、高等学校における通級による指導の実施に向けた準備に取り組んだ。いずれも、特別支援学校のこれまでの実践には収まらない、新たなニーズに応じた役割である。
- ・学校としての第一義である授業づくりをその時々に応じたテーマを設けて研ぎ澄ませること、時代の流れに応じて新たなニーズに鋭意対応すること、その両立を図りながら、今後も本校に課せられた役割を果たせるよう努めたい。

6 次年度への課題・改善方策

- ・研究テーマについては引き続き取り組み、本校の強みとして更なる充実を図る。
- ・人材活用など、地域の教育力を一層活かした実践を展開する。
- ・防災型C Sの取組では、特に防災教育のあり方について検討し、幼児児童生徒の防災意識の高揚を図る。